

## 総 括

### 1. 全体的事項

当事業団の平成24年度における業務運営基本方針は、第1に「市民のための公益財団法人として」、第2に「市政との連携・協力推進」、第3に「指定管理者の使命遂行」であります。

第1の「市民のための公益財団法人として」では、4月1日付けで公益財団法人に移行したことを当事業団の新たなる出発と位置づけ、改めて各種事業の公益性をより高めるよう努めました。

市民の目に見える当事業団の活動は、両施設に於ける自主事業であり、特に、市民文化振興に貢献する参加型の事業の展開に努め、文化センターでは国民文化祭の継承事業としての「おやじたちのコンサート」、松花堂美術館では市内で創作活動をされている作家を紹介する「美術工芸作家展」、市民交流の場としての「フリーマーケット」を新たに開催しました。

第2の「市政との連携・協力推進」では、市政の基本方針である「市民協働によるまちづくり」を念頭に、文化協会等の市民団体との連携を重視して各種事業を展開しました。

平成24年度は、市制施行35周年の各種記念事業が展開され、当事業団は文化センターにおける記念事業の推進に積極的に協力しました。

日常的には、社会教育課や文化財保護課との連携を密にして、文化振興と文化財保護に係る施策の推進に努めました。

第3の「指定管理者の使命遂行」では、市から与えられる指定管理料の効果的、効率的な執行と両施設の稼働率の向上と利用料収入の増収に努めました。

しかしながら、松花堂美術館では平成24年8月に山城地域を襲った豪雨による浸水被害のため展示室の使用を休止することとなり、入館者の大幅な減少に至りました。豪雨対策工事が市によって実施されることを踏まえ、豪雨における対応を改めて確認し、再発防止に万全を尽くします。

両施設・設備の老朽化が進む中、市による営繕工事の円滑な進捗に協力しました。

事業団の資金収支ベース（事業活動収支、投資活動収支、財務活動収支を含む。）の収支決算の状況は、収入（前期繰越収支差額を含む。）は予算額328,886千円に対して、315,002千円、支出は予算額326,084千円に対して、310,010千円、収支差額が4,992千円となりました。

人件費を含めた施設別では、文化センター管理運営経費が153,762千円で、対前年度比5.5%の増加。京都会館改修工事等の影響により利用が増加している施設利用料金収入では、40,634千円で対前年度比7.1%の増加。総利用件数は、3,831件で、対前年度比3.8%の増加となりました。

松花堂庭園・美術館では、管理運営経費が113,923千円で、対前年度比1.5%の減少。史跡部分の改修工事に伴う入園料の一部減免を実施している施設利用料金収入9,602千円に美術館入館料1,926千円を加えた合計11,528千円で、対前年度比12.8%の減少。入園・入館者数が35,000人で、対前年度比2.6%の減少となりました。

主催事業については、文化センターでは14事業を実施し、事業費が9,443千円、対前年度比63.9%の増加で、入場料等の事業収入は3,752千円、対前年度比14.7%の増加でした。松花堂庭園・美術館では27事業を実施し、事業費が9,976千円、対前年度比13.4%の減少で、事業収入は6,899千円、7.4%の増加となっています。

また、事業団の損益ベース全体（一般・指定正味財産増減。指定正味財産から一般正味財産への振替を除く。）の収支決算の状況は、収入額311,042千円、支出額306,957千円、未払法人税、住民税等177千円を加えた当期正味財産増減額は、3,908千円となりました。

## 2. 文化センター

市民文化芸術活動振興の拠点施設として重要な使命を持つ文化センターにおいて、その目的を達成するため、主催事業については、①「鑑賞型事業」（音楽、演劇、舞踊等の公開、美術、工芸の展示等に関する事業）、②「参加型事業」（市民文化の振興を図るための啓発及び文化団体等の育成に関する事業）を基本的

な二本柱として実施しました。

また、施設利用促進事業については、近隣の同規模施設と比べ、優れた音響効果と広くて使いやすい舞台設備の大ホールを始めとする諸施設の利用の拡大を図るため、親切丁寧な対応に努めました。

平成24年度に実施した事業は、別葉の通りですが、「京都フィルハーモニー室内合奏団」によるクリスマスコンサートとニューイヤーコンサート、三井住友海上文化財団派遣コンサート「及川浩治ピアノリサイタル」、「岡村孝子ライブ」、「イブニングロビーコンサート」「シネマ in やわた」、「邦楽のつどい」等を行いました。

鑑賞型事業・参加型事業、いずれも公演内容、対象客層、ともに多岐にわたっていますが、老若男女の多くの方々の趣向に合わせ、または、参加していただけのように、内容の精査とともに収支バランスを常に意識して運営に工夫をこらしながら進め、多くの方々のご来場・ご参加を得ることが出来ました。

とくに、「京フィルニューイヤーコンサート」においては、事前に実施した吹奏楽ワークショップに参加した市内中学高校吹奏楽部員に、プロ演奏家との合同演奏という貴重な体験の場を提供しました。

また、平成24年度は、市制施行35周年の年に当たり、八幡市とNHK京都放送局が記念事業として共催した公開テレビ番組「BSにほんのうた」を、市からの受託事業として実施し、著名な演歌歌手による歌の数々で楽しんでいただきました。

同様に、前年度に開催した「国民文化祭京都2011」の継続事業として「おやじたちのコンサートパートⅡ」を実行委員会主催で実施し、多くの市民バンドが参加し、大いに盛り上がりました。

経年劣化等による諸設備の大規模改修については、館の機能を最大限に維持向上できるよう、八幡市により計画的に実施されました。

今後とも、これまで市民や関係団体とともに培ってきた文化センターの成果をさらなる市民文化振興の原動力として、施設の適正な管理と安全安心な運営に努めます。

### 3. 松花堂庭園・美術館

八幡市が誇る歴史的文化遺産である「松花堂」や「泉坊書院」を中心に、茶室、竹林、椿園を有する庭園と、全国唯一の松花堂昭乗をテーマとした美術館において、それぞれの特徴を最大限活かしながら、茶道、華道、書道など各種の事業を八幡市文化協会や市民と協働で開催し、伝統文化の育成と振興に努めました。

美術館では、多方面に秀でた才能を發揮した松花堂昭乗の顕彰を展覧会や講演会、松花堂昭乗研究所事業の成果発表や昭乗関係資料のデータベースの閲覧などを行い市民交流と学習機会の場の提供を図り、市民の文化意識の高揚と文化芸術の振興に努めました。

庭園では、昭乗に関わりの深い事業を行いました。恒例の「第24回つばき展」では、「江戸椿コーナー」や食紅で色を付けた「青い椿」のイメージ作品の出品など新たな切り口を提供しました。茶道関係では、「第30回松花堂忌茶会」、「日曜茶席」、「新年初釜会」の開催の他、昨年引き続き、「立命館大学茶道部」による「手作り茶会」、八幡高校茶華道部による「学生茶会」など次世代への茶道文化の継承と振興に努めました。

育成事業では、市内の幼児から高校生を対象にした「松花堂席書大会」や小学生の伝統文化体験事業として「わくわく茶道・華道教室」や「松花堂書道教室」を開催しました。また、その他にも、美術館別館のギャラリーを活用した「八幡市内在住美術工芸作家展」の開催や、昭乗広場での「フリーマーケット」の開催など新たな取り組みを行いいずれも好評で、多くの市民が松花堂庭園に集っていただくことができました。

美術館事業では、開館10周年記念事業として、昨年大河ドラマの題字を担当した、新進気鋭の女流書家による躍動感溢れる書の魅力を紹介した「金沢翔子展―無になることは天賦の才―」を開催しました。

慶応義塾大学絵入り本プロジェクトと共催で開催した、企画展「奈良絵本・絵巻のたのしみ―おとぎ話のはじまり―」展では、室町時代から昭乗が活躍した江戸時代までのおとぎ話を題材にした魅力的な作品を紹介しました。秋季館蔵品展では、「松花堂の茶の湯―八幡の茶室に遊ぶ―」と題し、昭乗の茶の湯関

連の書状やゆかり茶道具、草庵「松花堂」や「閑雲軒」の絵図を紹介し、守り伝えられてきた松花堂の茶室やそこで楽しまれた茶の湯の一端を紹介しました。いずれの展覧会に於いても、学芸員によるギャラリートークや講演会を開催し、展覧会への理解がより深まるよう努めました。

この後、予定していた展覧会につきましては、8月14日の京都府南部豪雨の影響で、一部建物内に雨水が浸入しました。貴重な文化財を展覧する美術館では、万全を期すために、抜本的な改修が完了するまで展覧会を行わないことといたしました。

松花堂昭乗研究所事業では、研究生の学習支援と成果発表を行うとともに、特別講演会を開催し、広く市民に学習機会の場の提供を行いました。また、ホームページから、松花堂昭乗の作品や関連史料等のデータベースの閲覧を開始しました。

利用者誘致拡大には、観光バス旅行の回復を図るため、市観光協会とともに金沢方面へ営業活動を行いました。

施設の維持管理においては、文化財関係について八幡市教育委員会（文化財保護課）と連携して保全に努めました。草庵「松花堂」では、本格的に改修工事がはじまり、茅葺き屋根が取り払われ、軒や梁、柱等の補修や補強など保全が行われ引き続き25年度は、壁や建具などの改修工事が行われることとなりました。また、「泉坊書院」腰高障子（土佐光武筆）月次絵は、12枚すべて修復が完了しました。

以上が、平成24年度の総括であります。引き続き市の文化芸術振興と豊かな市民生活創造に貢献すべく、全力で取り組んでまいります。